



いづみ

No.83

街なかの美を守ろう

(題字 國松 明日香)

自作自選 53



《天上より》

寺田 栄

(2 ページに「作者の言葉」)

自作自選 53

作者の言葉

旭川聖苑内に共同墓をということで、配置、デザイン及びモニュメント、献花台を制作。上方に伸びる形は、天上より降り来たる水は地上を潤し、再び天空に戻って行く。永遠に繰り返される自然の営みに生命の再生をなぞらせ、背後には妊産婦の腹部を模した墳丘状の納骨部を配している。母胎より出でた命は再び胎内に戻ることをイメージとして。

(1949 年、福岡県生まれ。第 1 回本郷新賞受賞。)

タイトル：天上より
制作年：2018 年
素材：白御影石
サイズ：H400×W100×D80cm
(地面より 120cm 程度の盛土の上に設置)
設置場所：旭川聖苑 (旭川市東旭川町)

連載 宮の森の四季 53

本郷新記念札幌彫刻美術館

季節を楽しむ

業務係 河崎ゆかり

さっぽろ雪像彫刻展に参加をして 9 年、職員として勤務して 3 年目になりました。

美術館から札幌市内を見下ろせることを知ったのも、さっぽろ雪像彫刻展に参加してからです。雪像彫刻制作を終えての帰宅時には、いつも市内の夜景が疲れを癒してくれています。近隣の方々が展覧会に訪れた際には、日中の制作の様子から、「楽しそうに制作しているなあって見ていたよ」といった声かけもいただきます。この展覧会に参加したことで、この空間に居られることの悦びと、タイミングよく美術館の仕事に出会えたことに感謝しています。

季節の変化を感じることができる事も、この美術館の魅力と感じます。特に夏の到来は、セミの鳴く声から市内より一足早く感じることができ、樹々の緑色と葉音が心地よいです。しかし、秋はちょっと大変です。シラカバなどの落ち葉の掃除があるからです。次から次へと降ってくる葉には、夏のようなありがたみはありません。

冬はちょっとした楽しみがあります。「今日の一番はじめての来館者はだれかな？」と、前庭に動物の足跡を見つけた時です。一番驚いたのは鹿の足跡があったことでした。

この美術館の四季折々の風景が、私にとって癒しをもらえる場所なのです。



「北海道美術ネット」—道内アートの動向を記録

会 員 梁 井 朗

「北海道美術ネット」というウェブサイトを始めしたのは2000年の暮れです。当初は「ほっかいどうあーとだいありー」という名でしたが、1年ほどで改称しました。ホームページビルダーというソフトを買い、せっせと作業していました。

05年ごろから普及したブログで「北海道美術ネット別館」を始め、いつの間にか本来の「北海道美術ネット」は更新なくなり、現在に至っています。

1996年夏から98年春まで新聞社の文化部で美術を担当していました。絵画、彫刻、現代アート、写真、書道、工芸、デザインなどをカバーしなくてはなりません。私が美術を受け持つことになったのは全くの偶然で、大学はおろか高校でも美術は学んでいません。何も知識がないので、毎日のように札幌市内のギャラリーや美術館を必死に回り、たくさんの記事を書きました。

しかし、2年もたたずに担当替えです。「せっかく慣れてきたのに、もったいない」という気持ちがサイト開設を後押ししました。

なので、私がしていることは、この四半世紀ほとんど変わっていないといえます。なるべく多くの展覧会を見る。良いと思ったらサイトや

ブログに書く。その積み重ねです。時には本州で芸術祭や話題の展覧会を見ても、軸足は道内に置き続けてきました。

この間、3度にわたる転勤で札幌以外の勤務を余儀なくされました。地方ではそもそも展覧会があまり開かれていません。札幌に帰省する機会も限られていたので、近場にある野外彫刻を見てブログ更新を続けていました。

最近仕事が多すぎてブログを執筆する時間がないのが悩みです。ゼロ年代には札幌市内の展覧会はほとんどすべて見ていましたが、今は回りきれない会場も多く、記録としては不完なものになってしまっています。都心部のギャラリーが減り、郊外に分散しつつあることも、展覧会巡りを難しくしています。

かつて札幌など道内のアートシーンを記録していた媒体のうち、「北海タイムス」や、札幌時計台ギャラリーが発行していたフリーペーパー「21ACT」などはすでにありません。美術批評の筆を執っていた人たちも次々と鬼籍に入っています。北海道美術ネット別館を続ける意義は、決して小さくないはずです。地道に記録を続け、いつの日か北海道美術史の基礎資料になることを願っています。

「資料整理ボランティア」と「本郷新自著文献のデータ化」

本郷新記念札幌彫刻美術館業務係長
岩崎 直人

ボランティアの皆さんの協力を得て、記念館2階の大きな机がある展示室の一角を活動の場とし、2017年12月から始まった資料整理。当初は、そこで限定的に開設される図書・情報コーナーでの対応も兼ねていただいたことから「図書・情報コーナーボランティア」、その開設のない日は作業のみに徹していただいたので「スクラップブックボランティア」というように二つの異名を時に応じて使い分けていました。

さらに、コロナ禍の臨時休館中に受付・対応不要の図書の常設を整え、21年10月からは資料の整理のみに向き合うという意で「資料整理ボランティア」と改称しました。ほとんどが友の会の会員の方で構成され、この5年間の活動人数はなんと延べ455人に達します。

スクラップブックとは、本郷新に関する新聞や雑誌の記事が切り貼りされた冊子のことを言います。これが56冊もあります。その中から本郷新が著したものだけを抜き出し、文章を入力し、データ化するというのがこの作業の主たる目的です。彫刻芸術に関する数千字に及ぶ長文から数行で終わる作品評、内容は趣味の釣りのことや宮の森の思い出、雪まつりへの提言、諸事への雑感等さまざまです。

作業はパソコンを用いて入力する人、その

入力されたものが原文と違わないか校正する人に分かれています。コロナ禍の職員在宅勤務も相まって予想をはるかに超えて進捗し、5年間で延べ455人(職員は除く)の手により、自著文献579件のうち531件がデータ化完了、さらに474件が校正完了となりました。データ化達成率91.7%、校正作業達成率は81.9%です。終わりが見えてきました。

当初は作業が終了した暁には書物として上梓しようとも考えていました。しかし、その実現には多くの費用を要します。当面はホームページなどで公開するのでもよいのかもしれませんが。

実は、本郷新のマンガの出版も画策しています。編集者や漫画家にとってもこれ以上ない読みやすくまとまった資料となることでしょう。今年度末には本郷新の彫刻観に迫る「かく語りき本郷新」展を計画しており、そこでも大いに活躍することとなります。

各種メディアを通じて散在していた本郷新の言説が、切り取られ、まとめられ、デジタルデータに姿を変えて一本化され、故にさまざまな形にアウトプットできるようになって、いよいよ皆様の元に届けられようとしています。今暫くお待ちください。

東京の美術展で思ったこと

会員 奥井 登代

2月末、東京に行くことがあり、東京都美術館で開催する「エゴン・シーレ展」と東京ステーションギャラリーの「佐伯祐三 自画像としての風景」を見る機会を得た。

エゴン・シーレは画家を目指していた息子が好きだった画家で、亡くなる4カ月前、東京に出るときに画集を持参していた。エゴン・シーレはスペイン風邪のため、28年という短い人生の中で200枚もの自画像を描いたという。自分を見つめ、自らを追求していたよう。さまざまなポーズの自画像が展覧会でも見る事ができた。自画像から絵に対する思いがこちらにも迫ってくるようだった。

そんなエゴン・シーレにひかれたのか息子も自画像をたくさん描いており、自分と向き合い、自らの生き方、絵画に挑む姿勢を追求し、「見えない自分を描く」という詩も残している。息子もさまざまなポーズの自撮りの写真を遺して、キャンバスに塗りこめていた。生きている間にシーレの絵を見ることが出来たていたら、どんなに感動していたことかという思いに駆られて胸がいっぱいになった。

シーレはその時代、社会的には彼の芸術性が理解されず、絵をわいせつだと批判されたり、古い社会との戦いもあったそうだ。

東京ステーションギャラリーでは佐伯祐三の初期から30歳で亡くなる直前までの絵が展示されていた。佐伯

もまた小さい時から絵の才能を発揮していた。人物画や風景画などさまざまな絵を描いていたことがわかる展覧会だった。

佐伯が念願のフランス留学した時、憧れのブラマンクから自信作を見せたところ、「このアカデミック！」と痛罵され、そこから画家としてゼロからの歩みが始まったという。佐伯が到達した独特のパリの街の絵までの変遷もわかり、画家の苦しみを垣間みたように思えた。

芸術作品はその表現に感動し、その時代背景をも想像させ、芸術家の熱い思い、苦しみをも感じ、見る者に生きる力をも与えてくれる。私たちはそんな芸術作品を大切に後世に伝えていかなければならない。それはまさに友の会の活動そのものではないか！

実はこの旅の主な目的は北大卒業生が開催する太平洋戦争開戦の日に北大で起こったスパイ冤罪事件を伝え続けるための集いに参加するためだった。優秀な学生がそのために犠牲となった事件だ。再び戦争による悲劇を起こさせないために北大にモニュメント設置を要請しているが、記録となるモニュメントを残すことは芸術作品を大事にし、伝え続けることと共通するものがあるように思えた旅でもあった。

「全力疾走で頑張ろう」 高橋大作会長力強くあいさつ

本郷新記念札幌彫刻美術館の吉崎元章館長が講演

コロナウイルス感染拡大で開催が見送られていた彫刻美術館友の会の新年会が1月21日、3年ぶりに開かれ、久しぶりに一堂に会した参加者たちが新たな年の活動を誓い合った。

新年会は札幌・中央区のネストホテル札幌駅前(北2西2)で行われ、来賓、会員30人が顔をそろえた。冒頭、高橋大作会長が『「街なかの美を守ろう」を実践するため、全力疾走しよう」と力強く挨拶。次いで、本郷新記念札幌彫刻美術館の吉崎元章館長が「本郷新をいかに伝えていくか」の演題で恒例の特別講演を行った。



ハーモニカ演奏が華を添えた3年ぶりの新年会



新年の挨拶をする
高橋大作会長

講演に引き続き、橋本信夫名誉会長の乾杯の発声で会食に入り、新入会員が熱い抱負を語るスピーチが披露された。この後、ハーモニカ演奏の千葉智寿さんがミニコンサートを披露。讃美歌「アメイジング・グレイス」、童謡「赤とんぼ」などのほか、数本のハーモニカを使い分けて蒸気機関車(SL)の音を響かせ、会場を沸かせた。なお、例年、フィナーレに歌っていた全員での合唱はコロナ下とあって見合わせた。

会場のテーブルには感染防止のためのアクリル板が設置されたが、参加者たちは久々の懇談に時の経つのを忘れた。



熱演する千葉智寿さん

吉崎館長特別講演「本郷新をいかにして伝えていくか」



本郷新を語る吉崎元章館長

講演の中で吉崎館長は本郷新の芸術を、彫刻の基本的な魅力を知るうえで絶好の存在であること、今の時代が抱える問題について気付かせ、改めて考えさせる存在であることを強調した。そのうえで彫刻と社会の関係を考える上での先駆的な事例であると指摘した。さらに、本郷の代表作、「わだつみのこえ」を例に制作の経緯、作品に対する本郷の意気込みなどを豊富なスライドを使って解説した。本郷が目指した平和と反戦、共生社会へ向けた本郷の思いを次代を担う子供たちへ伝え、さらに彫刻への関心を広めていかなければならないと語った。

友の会初の本格的単行本

「ぶらり札幌彫刻めぐり」を刊行
全 90 ページ、彫刻 125 点を収録

友の会の初めての本格的な単行本、「ぶらり札幌彫刻めぐり」がこのほど出版された。札幌市内の公園、公共空間など街角にたたく野外彫刻を写真と解説で紹介し、街歩きなどの際、彫刻鑑賞に役立ててもらいたい。持ち歩きに便利のように手のひらサイズのポケット版。市内の図書館、小中学校などにも寄贈し、彫刻鑑賞のガイドブックとして活用を期待している。非売品。

「ぶらり札幌」はB6版(128×182センチ)、全90ページ。澄んだ青空をバックに天女が舞うような山内壮夫の《希望》を表紙にあしらった爽やかな



出来栄え。全体を「大通公園周辺」「札幌駅前通周辺」など14の地域・ブロックに分けて構成。それぞれの作品タイトル、作者、設置場所、制作年、解説文、作品の写真を添えた。取り上げた作品の数は125点に上った。巻末に作家略歴一覧が収録され、本道を代表する本郷新や朝倉文夫、佐藤忠良ほか北海道を舞台に活躍している若手作家のプロフィールが並ぶ。

掲載した作品はいずれも公園や街角で見慣れた作品や日ごろ目の当たりにしながら見過ごしていたものもあり、ガイドブックを手にした街歩きが楽しくなりそう。

出版のきっかけは2018年から20年にかけて24回にわたって友の会が北海道医療新聞社の雑誌「ケア」に連載した「さっぽろ野外彫刻美術マップ」を単行本化できないかという声が高まり、同新聞社の同意を得て21年ごろから準備に取り掛かった。

編集作業は掲載された雑誌からすべての原稿をパソコンに読み込み、全編を地域ごとに構成し直し、さらに対象地域の地図を作成し、作品の設置場所を挿入するなど、編集作業には不慣れなスタッフには苦労の連続。慣れぬコンピューター作業には外部の協力者の応援を求めた。

それだけに友の会としては「自分たちの力の結晶が彫刻芸術の振興に役立ってくればこの上ない喜び」とガイドブック完成に満足している。

「デジタル彫刻美術館、
「北海道デジタルミュージアム」へ
参入目指す
友の会が道へ申請

友の会は北海道が公開している「北海道デジタルミュージアム」に昨年からスタートした「北海道デジタル彫刻美術館」を参入させる方向で道などと折衝を始めた。

「北海道デジタルミュージアム」は道庁が北海道の「知の入り口」として博物館や美術館などの情報を取りまとめて発信するシステムで、北海道博物館、道立近代美術館などの施設の情報、収蔵している作品の資料などを検索できる。

このサイトに加入することによってデジタル彫刻美術館の利用が高まると期待されている。

2023 年度
彫刻美術館友の会総会

5月20日(土)13:30
札幌エルプラザ 環境研修室
(中央区北8西3)

講演会 (14:30～)

「こうしてできた北の銅像」を語る
フリーライター 小沢信行氏

*著書(1,500円)の即売も予定

事務局日誌▼2022年12月8日＝定例役員会(エルプラザ)23年新年会日程について▼27日＝会報82号発送作業▼2023年1月12日＝定例役員会(エルプラザ)新年会対応協議、ガイドブック「ぶらり札幌」進捗状況報告ほか▼14日、20日＝「ぶらり札幌」集中編集(エルプラザ)地図、解説文の校正▼21日＝友の会2023新年会(ネストホテル札幌駅前)＝吉崎元章美術館館長講演▼2月9日＝定例役員会(エルプラザ)「アートナビ サッポロ」運営の「参栄」棟方悦子社長来訪、会報83号編集企画

編集後記▼札幌・中央区の知事公館前庭にある中村晋也《残響》像は開拓使高官だった薩摩藩士・村橋久成の胸像。サッポロビールの生みの親とも言われる▼この村橋を小説「残響」(北海道新聞文学賞受賞)に書き、この像の建立に奔走した作家・田中和夫さんが2月24日に亡くなった。89歳。生前、親しくしていただいた畏友の一人。この会報「風見鶏」にも2012年、41号に「すべては『偶然の出会い』から」と題して、中村氏との出会いから「残響」建立までのエピソードを執筆していただいた。ご冥福を。(大内)

札幌彫刻美術館友の会

会報「いずみ」 No.83

2023年4月1日発行

発行人 高橋 大作

編集者 大内 和

(札幌市清田区清田5-4-6-30)

011-884-6025)

印刷 山藤三陽印刷

会報「いずみ」83号 目次

自作自選53	《天上より》	寺田 栄	・・・	表紙
宮の森の四季53	「季節を楽しむ」	河崎ゆかり	・・・	2
風見鶏「北海道美術ネット」		梁井 朗	・・・	3
寄稿「資料ボランティア」と「本郷新自著文献データ化」		岩崎直人	・・・	4
寄稿「東京の美術展で思うこと」		奥井登代	・・・	5
友の会ニュース	・・・		・・・	6-7
2023年友の会新年会／吉崎美術館館長講演／「ぶらり札幌彫刻めぐり」				
刊行／北海道デジタルミュージアム参入申請／2023年友の会総会予告				
事務局日誌、目次、美術館行事予定ほか ・・・ 8				

本郷新記念札幌彫刻美術館行事予定

本 館

■New Eyes 視線のはなし

開催中～ 4月16日(日)

■鈴木吾郎展 悠久を舞う

4月29日(土)～ 8月27日(日)

柔らかに屈曲した姿態、交差する腕や脚、端麗に伸びる指先など繊細で軽やかな女性像をテラコッタ(焼成粘土)によって表現し続けてきた鈴木吾郎の作歴60年記念展。デッサンを含めておよそ50点を展示する。

記念館

■コレクション企画展

本郷新の言説

開催中～4月16日(日)

■コレクション展

石と木

4月29日(土)～2024年5月26日(日)

札幌・大通公園の《泉》の像や戦没学生記念碑《わだつみのこえ》など塑像作品に代表作が多い本郷新だが、石造や木彫など不可逆性の要素が色濃いカーヴィング作品も手掛けている。

本郷新記念札幌彫刻美術館

札幌市中央区宮の森4条12丁目 ☎011-642-5709

友の会ホームページ公開中です！ご覧ください

<https://sapporo-chokoku.jp>